防災拠点「かわらんべ」の 20 年、奇跡の活動を支える

舩橋良太[1]　　加藤博[2]

[1] 中部地方整備局 天竜川上流河川事務所 調査課 (〒399-4114 長野県駒ケ根市上穂南 7-10)
[2] 中部地方整備局 天竜川上流河川事務所 (〒399-4114 長野県駒ケ根市上穂南 7-10)

本稿は、防災拠点として整備した「天竜川総合学習館」（愛称：かわらんべ）の開館から 20 年を経過し、現在も年間約 200 講座、年間 3 万人の高い水準の学習館の利用実態を明らかにし、この活動を支える事務所の取り組みを紹介するものである。

キーワード　防災, 総合学習, 防災教育, 環境教育, 広報

はじめに

防災拠点として整備した天竜川総合学習館「かわらんべ」は、今年 7 月で 20 年を迎えた。平常時の利用では開館当時から利用者が減るどころか、コロナ影響を別にすれば増えている施設である。学習館には他にない次のような特徴があり、その特徴が持続的な高い水準の利用をもたらしているものと考える。

- 展示よりも「講座」運営を中心に置いた運営としている
- 河川（特に天竜川）と防災を主なテーマとした地域密着型の施設と活動内容としている
- 天竜川に隣接し、水辺の楽校を主なフィールドとして活用し、維持している
- 飯田市、長野県、中部電力（株）、国の協力・協働により運営している
- 飯田市美術博物館の学芸員を中心に、専門分野の本物の講師と連携している
- 地域のボランティアスタッフを含み、地域全体で運営する体制としている

本報告は学習館の成立と活動内容、国としての関与について触れ、今後同様な施設計画の参考となることを期待したものである。

1　施設の設置位置

(1)　飯田市川路

天竜川総合学習館「かわらんべ」がある飯田市川路は、日本三大桑園として養蚕業に生きてきた「養蚕の里」といわれてきた。

一方で「水難の里」と自称せざるを得ないという川路・龍江・竜丘地区。上流に鵞流峡、下流に名勝天竜峡に挟まれた氾濫原の性格を持つ地区であり、水理的には急激な川幅の拡大による流速の低下、狭さく部による堰上げで水位が上昇しやすく、土砂が堆積しやすい特性があるといえ、天竜川の洪水と共生共存を求め続けてきた地区である。

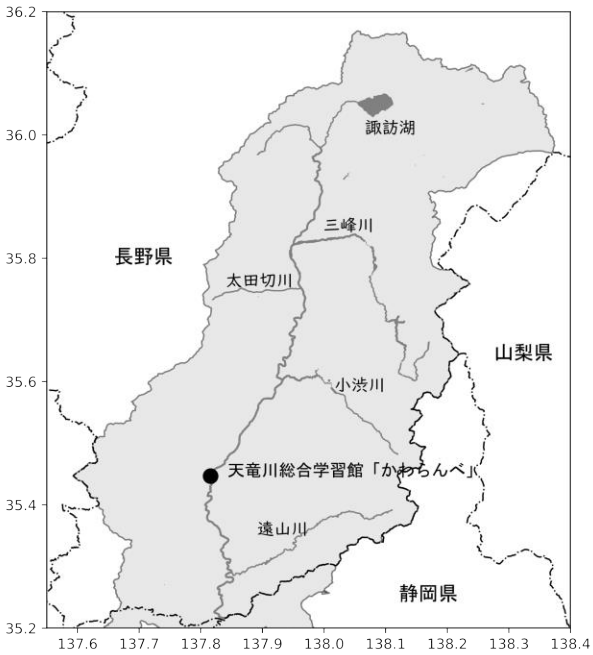

図 1　天竜川総合学習館 位置図

昭和 36 年 6 月（通称「三六災害」）の大きな浸水被害を受けたことを踏まえ、「2,000m^3/s 越流中堤防」と呼ばれる蛇かごで被覆した中規模洪水に対応する堤防整備を実施。

この対策後の昭和 58 年 9 月の台風 10 号でふたたび広い範囲の浸水が発生したことから、新しい土地利用を可能にするために堤防法線を死水域となる山側に移動し、約 98ha の新たな堤内地を計画高水位まで地盤

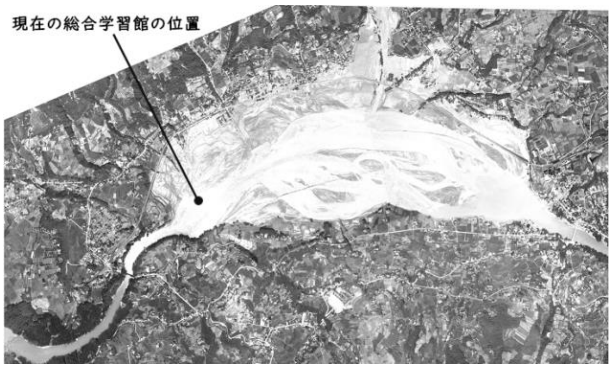

図 2　昭和 36 年 6 月洪水での天竜川の氾濫

図 3　天竜川総合学習館 オープニング（平成 14 年 7 月）

をかさ上げすることによる治水対策を立案。1985（昭和 60）年 3 月 21 日、中部地方建設局、長野県、飯田市および中部電力株式会社の 4 者で基本協定を締結。

家屋の一時移転、JR 飯田線の付け替え、面積約 $100ha \times$ 高さ約$6m$ の盛土、護岸の整備等を経て、平成 14 年 3 月 19 日に盛土事業、同年 3 月 31 日に河川改修事業も完成し、同年 7 月 7 日に「天竜川総合学習館（愛称「かわらんべ」）」および「水辺の楽校いいだ」がオープン。同年 9 月 7 日に天竜川上流川路・龍江・竜丘地区治水対策事業の完成記念式典が挙行された。

2　天竜川総合学習館という施設

(1)　成立と背景

地元、川路の水害予防組合は飯田市に対して 1986（昭和 61）年に要望書を提出し、その中に「地域振興貢献し得るような何らかの公共施設を盛土完成後に、速やかに当該区域内に設置する」と記されている。

その内容は組合から平成 11 年に「治水資料館」として具体的に示された。根拠として、5 つの理由が当時の組合長から示されている。その要点は次のようである。

1. 世紀的治水事業で安全になった象徴として必要。
2. 流域住民の苦難、葛藤、宿命的ともいえる歴史を後世に伝える。
3. 前例を見ない全面盛土事業は、全国へ情報発信する価値がある。
4. 天竜川の歴史と自然との共生・保護について考える場。
5. 地域のコミュニティ・センターとして地域活性化の拠点とする。

国では平成 12 年に予算付けされ、次の検討委員会を組織して施設内のレイアウトや展示の設計を進め、平成 14 年 7 月のオープンを迎えた。

- 「天竜川防災拠点施設（治水資料館）建設に伴う河川展示室・広報・展示室等企画検討委員会」（3 回）
- 「天竜川防災拠点施設（治水資料館）建設に伴う河川広報・環境学習室等の備品検討委員会」（5 回）

現在もこの名前で親しまれている「かわらんべ」は河童を意味する地方呼称で、飯田市が愛称を一般公募してオープンに合わせて決めたもの。

(2)　設置目的

1）洪水時における天竜川流域の河川情報の収集・発信基地及び**水防活動拠点**とし、洪水による被害を未然に防止、又は洪水被害を最小限にとどめるための施設とする。

2）天竜川上流川路・龍江・竜丘地区の治水対策事業の経緯及び日本有数の急流河川である天竜川を中心とした河川に関する情報を保存・展示し、かつ**河川に関する体験学習型施設**を具備することにより、河川に係る事業の意義、必要性を訴える施設とする。また、平成 14 年度から小中高校教育で導入される「総合的な学習の時間」に支援できる施設とする。

3）河川整備やまちづくり等を進めるための**地域のコミュニティー施設**（講演会、研修会、各種会合等）として利用する施設とする。

(3)　館内設備

鉄骨造 2 階建（延床面積：約 $950m^2$）

1. 河川状況監視室 (2 階)
2. 情報機器室 (2 階)
3. 河川展示・体験室 (1 階、2 階それぞれに配置)
4. エントランスホール (1 階)
5. 管理室 (1 階)
6. 水防資材倉庫 (1 階)
7. 総合学習室／地域コミュニティー室（2 階）

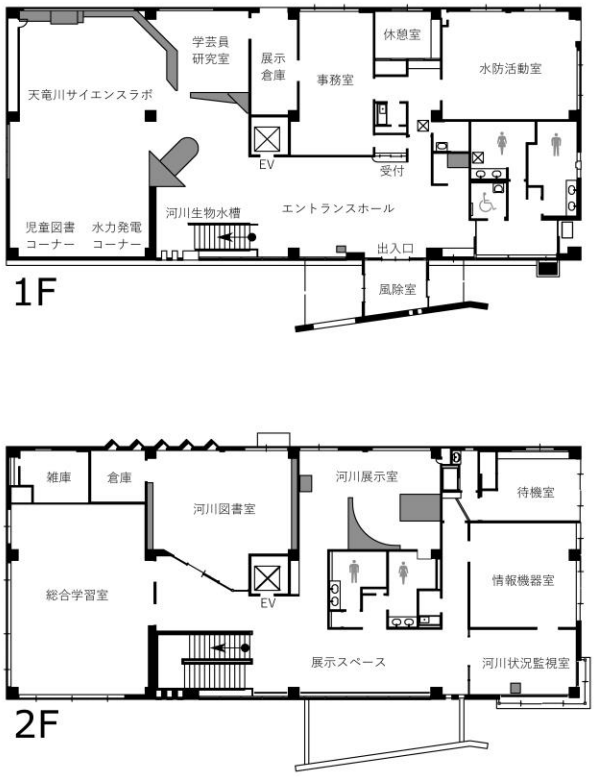

図 4　館内フロアガイド

8. 河川図書室 (2 階)
9. 2 階フロアー
10. 屋上

3　組織と予算

(1)　建設

建設当時は「天竜川防災拠点」という名称としていて、「天竜川防災拠点事業に関する覚書」(平成 13 年 1 月 11 日）を長野県飯田建設事務所、飯田市、中部電力（株）飯田支店、天竜川上流工事事務所と結んでいる。これによると、建築施設は河川管理施設として天竜川上流工事事務所が、外構工事は長野県飯田建設事務所が、館内備品や展示物（水力発電関係以外）を飯田市、展示物（水力発電関係）を中部電力（株）が施行することとしている。この 4 者が役割を分担して建設に加わることになったのは、この地区の治水対策事業がこの 4 者による共同事業だったからに他ならない。

(2)　管理運営方針

- 3 つの運営方針（役割）
  1. 防災情報の拠点的施設
  2. 天竜川流域の自然･環境･治水・歴史・文化等の総合学習
  3. 地域のコミュニティ施設
- 5 つの目的
  1. 防災拠点としての機能を確認し、よりよい在り方を研究します。
  2. “水辺の楽校いいだ”と相補的に利活用することにより、相乗的効果を期待できる運営を行います。
  3. 講座については幼児・保育園・幼稚園・小学生から大人までを対象にし、特に学校の行事等配慮しながら多くの子どもたちが参加できるように計画します。
  4. 地域と一体的活動ができるように地元から人的な支援を得られる運営体制とします。
  5. 天龍峡の景観への配慮や天竜川の河川環境保全にも積極的に取り組みます。

(3)　スタッフ

主なスタッフは館長、事務員、教育担当者、広報担当者のそれぞれ 1 名ずつの 4 名。必要に応じて飯田市美術博物館の学芸員が兼務する形で、アドバイスや講座講師を務める。その他にボランティアスタッフ「かわらんべ協力員」が講座のサポートを行う。

(4)　運営のための委員会

天竜川総合学習館は「天竜川総合学習館の管理運営要領」にその方法が定められている。運営委員会（管理運営要領 第 3 条）と企画会議（管理運営要領 第 4 条）の 2 つの組織で運営の基本を計画。企画会議で各種計画案を作成し、運営委員会でその案を審議する方式としている。

実務的には、企画会議にはかるための素案を議論する場として事務局会議を開催している。

a）運営委員会：学習館内施設及び展示物の有効活用等による学習館の円滑な運営を図るために、関係委員等で構成している。議長は飯田市の建設部長。

b）企画会議：学習館内施設及び展示物の有効活用等による学習館の円滑な運営を図るために、関係幹事等で構成。議長は飯田市の建設部 管理課長。

c）事務局会議：会議構成員に明確な規定はないが、総合学習館を運営するための事務局の会議。企画会議への審議のための案を議論する場。

(5)　運営予算

人件費　館長および事務員は（一財）飯田市天竜川環境整備公社の職員の兼務で、公社の人件費による。教育担当は飯田市負担、広報担当は天竜川上流河川事務所の業務として席を置く。活動にかかる費用はサポートスタッフなどのボランティア（かわ

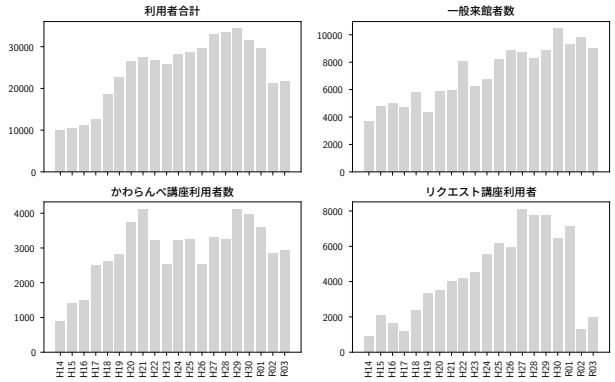

図５　かわらんべ利用者の推移

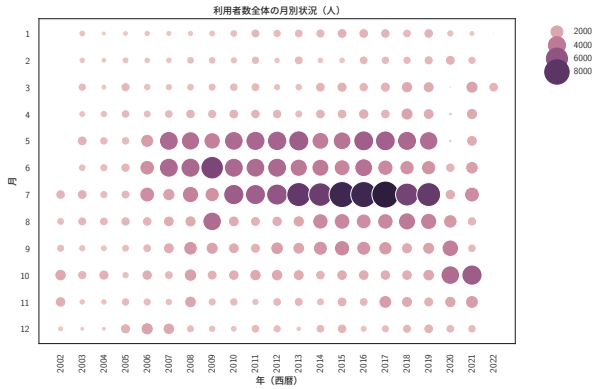

図６　年月別かわらんべ利用者（全体）

らんべ協力員）を最大限活用。

活動諸費　公社の予算を基本に、長野県の支援金など各種ファンドも利用。

施設維持　建物は河川管理施設として国が補修。展示物は展示物の設置を行ったものが実施（ほとんどは飯田市）。

4　活動内容

図５は開館した 2002（平成 14）年７月からの利用者数をグラフにしたもの。開館から 5～6 年は知名度も低くかったのか、徐々に利用者が増えて利用者数は高い水準を保っている。同種の施設が開館後に利用者数の伸び悩みや低下をかかえることもあると聞きくが、当館は地域の子どもたちが利用するサイクルが定着しているといえる。

国内では 2020（令和 2）年１月頃から始まった新型コロナウィルス感染症拡大とその対策により、出かける機会が激減。このような社会情勢にあって、当館も休館や活動縮小を余儀なくされており、コロナ前の社会活動復活が待たれるところである。

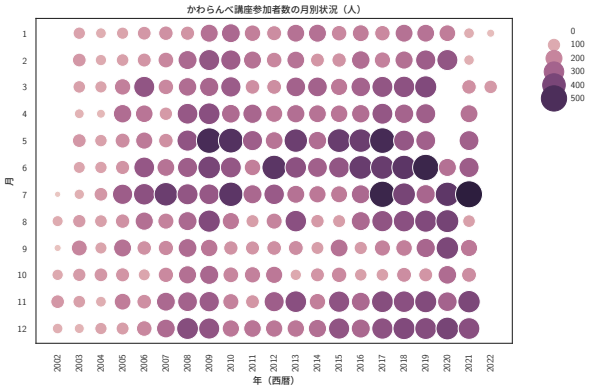

図７　年月別かわらんべ講座参加者数

図８　避難所開設講座

(1)　かわらんべ講座

講座の開催状況はかわらんべ講座が年平均 100 講座で、天竜川総合学習館の中心と位置付けられる講座活動。

講座の内容は様々だが、多くは館のすぐ近くに広がる「水辺の楽校いいだ 川路地区」をフィールドとしたもの。いわゆる「川」をテーマとした講座や「天竜川」自体を素材、基盤としたものが多い。特に開館と同時にオープンした「水辺の楽校いいだ」に隣接しており、ここをフィールドにできるところが大きい。

近年は「防災」をテーマとした講座も増えてきている。昨年行った防災講座では、飯田市危機管理課の全面協力によって学習館で簡易避難ルーム・ベッドを設営する体験講座や、花崗岩が風化すれば手で触ってもボロボロになる体感講座など、提供側のコンテンツも増えてきている。

講師も飯田市美術博物館の学芸員や地域で活躍する研究者などが担当することも、人気の持続の要因になっている。

(2)　リクエスト講座

2000（平成 12）年から段階的に始められた「総合的な学習の時間」は、地域のことを体験的に学習できる時間としても活用され、学習館の名前のとおりその受け皿としても当初から学習館は役割を担う施設であった。

その他にも学校以外の研修や生涯学習の一環としてその要望に応じたきめ細かい講座を受け付けている。リクエスト講座は約 300 名/月。

(3)　かわらんべ祭り

2006（平成 18）年から 7 月下旬に行っている「かわらんべ祭り」は、天候が晴天・小雨によらずおおむね 1,000 人を超える参加者を得ている。ここ 2 年は新型コロナ感染症拡大防止の観点で中止。

人気のイベントではあったものの、費用もかかることから今後は「夏休みスペシャルウィーク」としてその遺産を継承したイベントに変更していくこととしている。

(4)　貸し館利用

地域の様々な学習活動、イベントなどに無償で総合学習室を貸し出ししている。その他、河川図書室には河川と当地域・流域に関する様々な資料をそろえており、特に専門書、図鑑などがそろえられているところが大きな特徴である。

(5)　アウトリーチ

外来種駆除　近年急速に生育範囲を拡大してきているアレチウリの駆除を中心として、地域の駆除活動に講座のひとつとして参加。公社からの燃料・資材の提供などに及ぶ支援も実施している。

環境展等　伊那市の環境展や駒ケ根市の河童まつりなどに参加し、水生生物の紹介、展示、直接触れることのできるブースとして人気を集めている。

水防演習　水防工法の体験として「土のう拵（こしら）え」として参加。親子で水防工法を体験していただく機会の提供。

5　事務所の関与

(1)　学習館の建設

学習館の建設にあたり、検討委員会を通じて地域が必要とする活動内容に適した施設の企画・検討に参画してきた。

施設設計上の特徴的なところは、この手の施設に多い展示部分はあまり広くせず、講座を中心とした活動をサポートするために、サイエンスラボと称する講座開催部分とリクエスト講座に応じるための総合学習室を広く配置している点にあると思われる。

(2)　広報活動支援

広報担当として業務委託者の席を設け、天竜川の魅力を発信するほか、河川利用の安全指導、外来種駆除や貴重種保全のリーダー的役割も担っている。現在の

図 9　インターネットページ

図 10　広報誌「かわらんべ」

担当者は水生生物の専門家であり、専門的知識を生かした広報活動を行っている。

その活動の一部例を下記に示す。

インターネット　天竜川総合学習館の Web ページの保守（更新・情報発信・講座予約・施設予約 等）。

広報誌　月刊の広報誌「かわらんべ」の取材、写真撮影、記事執筆、版下制作、校正、配布、Web 掲載まで。

講座運営補助　専門知識を生かした講座の企画・準備・運営。講座全般での広報用記録・整理・広報誌への掲載原稿作成等。

(3)　建設現場の見学講座

毎年、河川・砂防の工事現場の見学を講座として企画。現場見学を通じて、その目的や地域の安全安心につながることへの理解を深めていただけるよう資料を準備。人気の講座となっている。

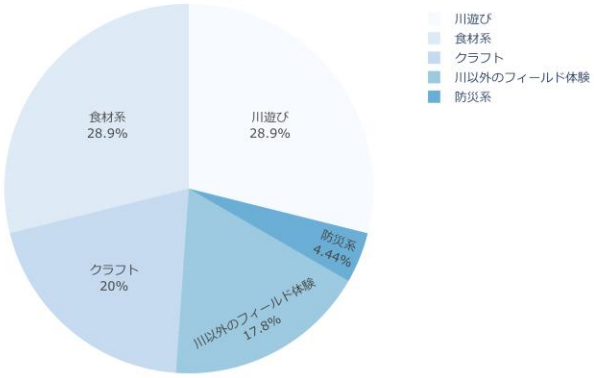

図 11　かわらんべ講座で印象に残ったもの

(4)　その他

事務所では「語りつぐ天竜川シリーズ」（土木学会の広報大賞受賞）を刊行しており、いまや 60 巻をこえる人気の冊子である。学習館が 20 年を迎えるにあたり、学習館の歴史や活動内容を最新刊第 66 巻として作成し、地域の図書館、関係有識者等に配布。インターネットにも PDF として公開した。

6　利用者の声

(1)　利用者アンケート

昨年度、頻繁に利用する利用者へ、アンケートを行った。19 組の子どもたち（年中～中学校 1 年生）に、今までの講座の中で印象に残ったものを複数回答してもらったものが図 11 である。

川遊び、防災、フィールドワーク（川遊びを除く）、クラフト、食材系に分類してみると、防災系は弱く川遊びは食材に匹敵する人気がある。フィールドワークとともに、野外での体験講座をあげる子どもは半数となる。食材系やクラフト系の講座もフィールドの活用が多いので、野外での講座や野外活動を組み合わせた講座は印象に残るのだと想像される。

(2)　卒業生の声

過去にかわらんべ講座のほとんど（7～10 割）に参加していた子どもたち、所謂「かわらんべ講座卒業生」にも当時を振り返ってのコメントを求めた。

大学院生、医者の卵、社会人、地域で農業をされている方など職種も様々で、遠方にお住まいの方からもコメントを寄せてもらった。以下に、その声の一部を紹介するが、学習館の存在が子どもたちの成長過程に大きな意味を持っていたのだと、あらためて考えさせられる重みのある回答に驚いた。

> 感受性豊かな時期に色々な人やモノに出会わせてくれて、世界を広げてくれた場所。自分たちにとって良いタイミングでオープンしてくれたので、ありがたかったです。生活の一部でした。

> かわらんべのおかげで、自然に対し興味を抱くようになり、それが自然と人体や生理学の興味へ移るようになったため、かわらんべのおかげで今の自分がある。

> 当時（小～中学生時代）は「かわらんべが楽しい」という理由で、たくさんの活動に参加していました。この経験を通じて、自然や動植物への理解を深めることができたと思います。
> 現在、自然や動植物好きが講じて、農業関係の仕事をしています。かわらんべでの、かけがえのない経験が私の土台になっていると思います。

> 自分が学校に行っていなかったため、家の外（室内、という意味ではなく）に出れた唯一の場所であり、家以外で自分に自信が持てる場所でした。
> 野鳥のこと、植物、川、自然のことはもちろんですが、自分を育ててくれた場所です。
> いつか子供が出来たら連れていきたい。その子たちも通ってくれたらな。

7　今後の活動

今年 7 月で開館から丸 20 年という節目の年である。地方都市に位置することから市からの活動資金も潤沢にあるわけではなく、過去に行ってきた「かわらんべ祭り」なども縮小をしていかざるを得ない事実もある。

ただし、明るい話題もある。昨年度「手づくり郷土賞」を受賞し、本年度は開館から 20 年支えてきた事務員とボランティアスタッフに河川愛護表彰を受賞した。このことでスタッフもボランティアの「かわらんべ協力員」も活動継続・発展に対する士気がいっそう高まっている。

事務所としても支援とかサポートということではなく、地域になくてはならない存在となりつつある学習館の活動を共に苦労し、楽しんでいけるパートナーとなっていきたい。

最後に昨年、歴代の教育担当と座談会を行ったとき、初代教育担当で施設の企画検討時に奔走した地元の今村理則氏の言葉を紹介したい。

“もっと人のたくさん集う施設がいいと思い、それで講座を中心とした施設活用を計画した”